

S・シュロススタイン著

『アジアの新小竜たち』

Steven Schlossstein, *Asia's New Little Dragons: The Dynamic Emergence of Indonesia, Thailand, and Malaysia*, シカゴ, Contemporary Books, 1991年, xii+370ページ

谷 口 興 二

I

本書は評者にとっては、その出版社の名前同様コンテンポラリー(contemporary)な本であることを実感させるものであった。というのは、随所に東南アジア人および日本人で現に活躍中の民間・官界の人名が現われるが、その中の数名が評者にとって親近感のある人名であったからである。アジアの新小竜たちとして取り上げられた国は、インドネシア、マレーシア、およびタイで、本書はその民間と政府当局双方の人々にインタビューして得た内容に基づく。これら3カ国における政治経済的状況を述べた3つの章が本書の白眉である。3カ国についての各章の間の関係はあまり重視されていない。

新小竜たちとは何か。小ドラゴンか、大ドラゴンかは別にして、「新」と付いている意味は、「旧」竜がいたからである。すなわち、日本、およびアジアのNIEsといわれている国々である。これら新小竜たちがアメリカをはじめ、世界に送るメッセージは何なのか。それが本書ではどう受け止められているのか。これらの点に本書を読む際の興味深いポイントがある。しかし、著者は関心をもう少し特定の分野に絞っている。たとえば、本書は次の疑問に対する答えのひとつの試みである、と著者は「前書き」において述べている。曰く、

東アジアのその他の国(ここにいう新小竜たちを含めて——引用者)は日本と小竜の成功を再現できるのか? 途上国の発展は何故アジアだけにおいて生じてきたのか? 成功のためにどのような政策が考案され、実行されてきたのか? ラテンアメリカ諸国あるいはアフリカ諸国にとっての貴重な教訓は

『アジア経済』XXXIV-7(1993.7)

あるのか? 成功は国内の諸要因——政治的、社会的、文化的、教育的——にどの程度の比率で帰着させることができ、どの程度が外的要因によるものなのか? 日本は何故これら諸国を優先的に扱い、アメリカはそうではないのか? これら3国の新小竜は数年後、アメリカに今日の旧4小竜と同じように知られているのだろうか、それとも新興工業国現象の終焉をみることになるのだろうか? もしこれら3国が急速な成長を続けるとすれば、アメリカの民間・政府部門を問わず、その外交政策・経済政策に対する含意は何であろうか? 彼らは来るべき情報の時代に意味ある役割を与えられているのだろうか、そして彼らはわれわれのパートナー、あるいは敵になるのだろうか?(註1)(ix~xページ)。

以上であるが、アメリカの外交・経済政策に対する意味を取り上げていることから、これらの幅広い疑問の中では、新小竜たちがアメリカに送るメッセージは何なのか、に特に著者の関心があると思われる。限られた時間で多数の本当の意味でのオピニオン・リーダーに面接し、限られた紙幅の中で彼らの意見をうまく読者に伝えることは、困難な課題であると思うが、著者は彼らの意見を説得力ある形でわれわれの前に提示することに成功している。

取り上げられた各国内の分析では、経済、政治はもとより、社会、人種、宗教、その他、その国を構成する諸側面が論じられ、ときにはやや煩雑な印象を与えるが、その分だけその国の内幕を知ることになり、かえって興味を抱く読者もいるかも知れない。

各国の事情をよく知る人にはその知識に新しいものを加えるどころか、たとえその知識の整理に限ってもあまり有用ではない虞れがあるが、そうでない人にとっては本書は各国についての知識を深めるための格好の入門書といえよう。以下に、まず本書の概要を紹介し、次いで評者の感想、批評を述べる。

II

本書の構成に従って、その中で評者の関心を惹いた主な内容を記す。

序章は「新、旧のドラゴンについて」と題されてい

る。新、旧のドラゴンについて、対比する形で、また新小竜たちの間での比較を中心に、その経済、社会の特徴を論じている。

小竜たち (little dragons) はその豊かな伝統的文化、社会組織をみると、低開発ではなく、高度に発展したものであるということがわかってきたため、新興工業国、と呼ばれるようになったと著者はいう。彼らは、「箸」の文化に象徴され、また NICs と呼ばれた。1980年代中頃から、新 NICs が登場して、混同する虞れが出てきたので、新しい方をここでは NIEs と呼んでいる。

NICs についての諸特徴は、権威主義的政治体制、政府・企業間の協力、外向的経済、民間貯蓄増大への巨大なインセンティブ、公教育への絶えざる関心、応用面の R & D への強い力点、付加価値生産への一様な集中、目立つ天然資源の欠如、比較的中立であることをその役割とする宗教、個の集団への奉仕、文化的同質性、および発展に好ましい環境とインフラストラクチャーの形成、が挙げられている。これらすべての項目の評価について、著者は NIEs の各国におけるインタビューのための事前的準備とみているようである。

第2章は「インドネシア——多様性の中の統一——」と題されている。インドネシアの島々は緩やかに繋がっている鎖にたとえられている。アメリカ人が相手の立場に立って（彼らの地理的、文化的な限界を共有して）世界をみるのが苦手な国民であることに留意して、著者はアメリカ人にとってイメージし難い国であったという。近くに前植民地のフィリピンがあり、ヴェトナム戦争の影響もある。諸島からなる国であることも理解を阻む一因になっている。スハルト (Soeharto) 大統領の軍の「二重の機能」によって軍人がいくつかの役所のトップに立ったこともインドネシアを理解し難い国にしたと著者はいう。スカルノ (Sukarno) の指導された民主主義の混乱によって代わって、スハルトの、もっと権威主義的な新秩序が現われ、長期にわたる経済成長の堅実な基礎を造りあげた。経済面ではスハルトは対外債務をうまく繰延べた。5 年計画を立案・実行し、食糧増産と物的インフラの整備に努めた。石油ショックの影響は無視できないほど大きかった。たとえば、1974年以降の2次計画・3次計画の期間、

石油ブーム (oil boom) を利用してトウモロコシ (corn) やキャッサバ (cassava) 等の商品作物の耕作が盛んになった。

著者は、インドネシアでは経済の規制緩和は規制を無くすことではない、という。むしろ、スハルトは規制をうまく使って経済の運営に成功してきた、と著者は評価しているようである。また経済の発展にとって、3極（官僚、華僑ビジネスマン、軍部）間の協力友好関係が重要な前提となった。華僑についてはプラナカン (peranakan) とトトック (totok) との関係、軍部 (ABRI) については「二重機能」、が問題として取り上げられている。

著者によればインドネシアの政治を表わすキーワードは、合意と強制である。1988年に、スハルトが5選されたとき、「新秩序」は第3の10年間を迎えた。パック (Pak Harto) は、この時期に政治的安定が強制的ニーズとみられるほど必要であったが、それを「建国五原則」(Pančasila) のイデオロギーによって切り抜けた。合意と強制の中に、継続性、開放性といった要素が介入してくる。継承問題は、スハルトが任期を後2、3年残してはいるが長期にわたって在位してきたためもう替わるであろうと多くの人が観測している一方、もう1期就任するかも知れないこと（実際、1992年の選挙をへて就任した）、および彼の子息の誰かが後を継ぐのか、の問題である。たった一度だけ、スカルノからスハルトへの政権の継承が行なわれただけであるから、人々が将来の継承に対して憂慮するのも無理からぬこと、とされる。しかも、スカルノからスハルトへと継続する過渡期には、重大な傷害テロや詐欺が蔓延したのである。開放性とは、政治的自由化を進めることであるが、スハルトはこれには慎重であるとみられている。現在、ABRI、官僚、都市のビジネスマン、あるいは富農層から支持され、権力を維持しているが、スカルノ時代の経験から、政治プロセスに参加するグループの数が多くなるほど政治体制が不安定になることを知っているからである。

著者はさらに、報道 (press)、イスラムと権威主義、反対派への罰、社会不安（何か限度を越す要求があると直ちに水面にまで浮上してくるジャワの鱷にたとえられる）、についてもコメントしているがインドネシ

ア社会に対する理解の程度がかなり高いことを窺わせる。

インドネシアの外交政策の特徴は外向 (outward looking) である、と著者はみている。著者によれば日本は2国間関係では他の国をはるかに引き離して重要な国であるが、日本経済とインドネシア経済との雁行形態の形成の可能性にも触れている。

第3章は、「タイ——バンコク・コネクション——」と題されている。タイの首都である以上の意味をバンコクが持っていることを、著者はバンコク・コネクションという言葉で示している。文化と歴史のルーツとして、モン (Mon) 族、タイ (Tai) 族、あるいはクメール (Khmer) 族が9世紀頃から南中国から移動してきたことが述べられている。しかし、アユタヤ朝の歴史 (139ページ) はここではどういう意味を持つかが不明である。

タイの経済について、著者の第1の指摘はなんといっても日本の植民地である、ということである。自動車産業に関連して、交通状況、特にバンコクの混雑のひどさが語られる。1981年以降、毎年約10万台の自動車と35万台の二輪車が増え続けてバンコクの混雑に輪をかけ、現状では (90年末)、約200万台が平均時速8kmでバンコクの中を「這って」いる、という。著者によれば、市内には主要な踏み切りが10カ所あり、そこを1日当り129回、列車が通過する。1989年に、タイにおける日本の投資 (直接投資) について大使館の生田 (章一) 氏は、インフラの不足は明らかであると述べた。日本の投資は当然マレーシアやインドネシアに向かうであろう、という。タイにおける日本のプレゼンスを評して、タイ ACC (アメリカ商工会議所) の代表は、かつて軍人であったが、「われわれは (先行車の——引用者) 砂煙りの後ろに取り残された」 (147ページ) といったとのことである。

著者はさらに、日本は国内経済ばかりでなく対外貿易においても支配的であり、ワシントンの政策担当者は強い円で対日貿易赤字が削減されると思ったかも知れないが、日本は付加価値の低い製造業を低賃金で、通貨の強くないタイやインドネシアやマレーシアに移し、シチズンやトミー (玩具) のように海外に生産センターを持つようにならってきていること、また直接

投資 (FDI) 急増の日本経済に対する影響もあるが、日本の海外生産の増大がタイ経済に大きく影響したことを指摘し、GDP 成長が、4、5%から10%近くにはね上がった、と述べている。

今後の発展方向についての観察事項のうち、インフラの強化 (基礎固め) について、チャムロン (Chamlong Srimuang) 知事にバンコクの問題をインタビューして聞いた結果、人口が多く、問題も多いとの見解であり、投資委員会 (BOI) のサタボン (Staporn Kavitantont) 氏は問題はあるが、時間が解決するから結局「問題ない」といったとのこと。これでもわかるように、著者は自分の見解を示さず、その国の人々に語らせている。

経済発展の最低線の条件として、指導力のある強い政府がある役割を果たしてきたことが指摘されている。商業大臣を経験したこともある、大企業の経営者であり知識人でもあるアマレート (Amaret Sila-On) 氏は、「昔は、商人が10人掛かりでも大臣 (お役人) の裕福に及ばなかった」 (というタイの格言を引用) (169ページ) といったが、現役の政府高官、主要企業の経営者等の発言であるから、タイの現状を伝えるという意味ではこれほど説得力のある方法は他にはあるまいと思われる。タイの政治についていえば、著者によれば過去50年間に13の憲法と26の異なる内閣を経験して、タイの政治は不安定であるようにみえるが、実は違うという。タイ政治の3極構造 (triangular partnership) は、国王、軍部、政党から構成される。4極構造は、これに官僚機構を加える。5極構造は、さらにそれにサンカ (Sangha. 仏教僧侶の階層であってタイでは力がある) を加える。それぞれの極が互に関ぎ合うと同時に、その間での結託も行なわれる。タイを観察してきた西欧の政治学者によれば、「タイの政治は、西欧の民主主義とも、アジアの独裁とも違っている」 (172ページ) という。

第4章は「マレーシア——純粹の肯定的行動——」と題されている。著者の見方は、政治経済がきわめて政治的である場合は政治からは逃れられない、またその下側では経済的生き残りへの争いが続いている、というものである。華僑ビジネスマンであり、かつ学者でもある陳徳鴻 (Paul Chan Tuck Hoong) 氏は、評

者の属するアジア経済研究所内外を問わずよく知られている一人であるが、現在、教育コンサルタント事業を運営している。彼も、また同じくよく知られているカマル・サリ (Kamal Salih) 博士も、マレーシアの頭脳150名が参加している国家経済参与委員会 (NECC) のメンバーである。マレーシアの政治の特徴は、制度化された腐敗にあると著者はみている。事例が12件挙がっている。(1)UMNOの分裂、(2)法曹界の弱体化、あるいは(3)ユナイテッド・エンジニアーズ社 (United Engineers [Malaysia] Bhd.) 事件等である。著者は、マレーシアの政治は、端的に言ってエリートの、エリートによる、エリートのための政治であるという。著者がプミトラ銀行の問題を整理することで1984年の時の人になった、ザカリア (Ahmad Noordin Zakaria) 氏に面接し、何故マレーシアではこうも制度化された腐敗が広がっているかを問うた時、彼は、(われわれは) 金権政治 (money politics) という怪物を生み出してしまった、と答えた。ここで著者が指摘しようとしているのは、経済の政治への従属ということであろう。

最後の章は、「アメリカの外交・経済政策に向けての含意」と題されている。著者の見解の多くはここでもさまざまな形で述べられているが、東南アジアにおける日本の役割との関連で、著者が日本のスタンスに遠慮がみられることを「隠された債務」と表現していることが眼を引いた。

III

本書を通読すると、アジアの新小竜たちを観察して、その経済発展の勢いが強いことを実感する著者の姿が彷彿として目に浮かぶ。著者の、冒頭での献辞に、

しばしば逆境的条件の下での激しい労働とたゆまざる努力が、子孫には目覚ましく高い生活水準を、また他地域の途上国の人々にはインスピレーションと希望のモデルを創り出すこととなった東南アジアの人々に捧げる。

とあるように、著者はラテンアメリカ諸国あるいはアフリカ諸国にとっての貴重な教訓はあるのか、あるいは、東南アジアのその他の国は日本と「旧」小竜の成

功を再現できるのか、といった疑問に対しては、好意的、積極的に考えている。

とはいえ、本書は、インドネシア、マレーシア、およびタイの民間と政府当局双方の人々に、インタビューして得た知見を基本にしている。それゆえ、新小竜の来歴 (何故、どのようにしてこれらの国々が小竜となったか) についても、また新小竜たちが現代人の考え方に与えた影響等についても十分に検討されていない。また将来展望も、面接相手の見解の総合からは何も出てこないようにみえる。たとえば、インドネシアでは、経済発展は新段階に入ったとみる見方もあるが、その成果が現われるまでには時間がかかりそうである。タイの経済発展は、特に1980年代の後半には目覚ましいものがあつたが、それにもかかわらず、先進諸国との間では格差が拡大する一方であつた。マレーシアの経済発展は、これまでは世界経済環境が好ましかつたこともあつて、順調にみえたが、経済的にはたとえ「オフショア生産」で飛躍できるとしても、現在は力をためている感じで静まっている。

3国に共通にいえることであるが、普通の (man-on-the-street) 消費者の顔がみえてこない。都市における中間層^(注2)の興隆で、消費者が飛躍的に重要性を増している東南アジアについては、その掘り下げが必要である。

現在のこの時点で、本書が刊行されたことの意義は、経済的には力をつけている最中であるが、先進国に比較すればまだ弱小であり、世界の工業生産の中心になるのかまだはっきりしないこれら東南アジアの新小竜たちの今後の発展方向を読者にはっきりと把握させることにある、と評者は考える。もちろん、資源に基礎を置く工業でも、労働力の技術に基礎を置く工業であってもよい。しかし、工業で世界経済に貢献するのか、農業等の第1次産業で世界経済に参加するのかをまず選択しなくてはなるまい。その選択は彼ら自身に委ねられるにせよ、日本や欧米の部外者の立場からの助言等があつてもよからう。当事国の人々に対するメッセージは、彼らの発展戦略を再検討する必要があるならば、その再検討の参考資料になりうるということであろう。

(注1) 対象3カ国以外の地域への影響を取り上げるについては、ヴォーゲル(Ezra F. Vogel)の『アジア四小龍』(渡辺利夫訳 中央公論社 1993年)の該当箇所(153~158ページ)と同様の見方であると思われる。

(注2) アジアの都市における中間層の興隆と、消費者の重要性の増大を、ASEANの社会・政治的体制から

論じている、クロウチ(Harold Crouch)に比べても分析が不足している(Crouch, H., *Economic Change, Social Structure and the Political System in Southeast Asia*, シンガポール, Institute of Southeast Asian Studies, 1985年, 参照)。

(アジア経済研究所総合研究部主任調査研究員)